

特集
島根
～神々の国の「田舎」づくり～

Special Features
Shimane
Constructing "pastoral districts" in the kingdom of the gods

攻める(未来の創造)
Advance (Create the future)

世界遺産石見銀山、21世紀への輝きと共生

～アジア初の産業世界遺産に登録～

中村俊郎

NAKAMURA Toshiro

中村プレイス株式会社/代表取締役
石見銀山資料館理事長



1—世界遺産の仲間入り

私の住んでいる島根県大田市大森町は平成19年7月2日、ニュージーランドのクライストチャーチで開催されたユネスコ(国連教育科学文化機関)の世界遺産委員会において、「石見銀山遺跡とその文化的景観」を世界遺産に正式登録する決議によって、見事に世界遺産に仲間入りしました。

当初は諮問機関であるイコモスが「登録延期」を勧告したために、登録が不安視されましたが、近藤誠一ユネスコ特命全権大使、外務省、文部科学省、文化庁、島根県、大田市、地元住民など多くの人々の総力あがりの反転攻勢が功を奏し、大逆転劇と言われるドラマチックな登録決定となりました。日本では14番目、世界の851カ所に仲間入りしたのです。この委員会へ日本から参加した一人として、またこの町に生まれ育ち、ここで企業経営をしてきた者としても、この喜びは万感の想いが交差して、一口では言い切れぬものがあります。その気持ちを抱いて記してみたいと思います。



写真1—石見銀山周辺の景観

2—石見銀山のもつ普遍的価値

石見銀山遺跡がもつ普遍的価値は三つあります。

- ① 世界的に重要な経済交流を生み出した
 - ② 伝統的技術による銀生産方式を豊富で良好に残す
 - ③ 銀生産から搬出に至る全体像を不足なく明確に示す
- 中世から世界を駆け巡った高品位な銀を生み出した石見銀山遺跡は、572haに及ぶ広大な核心地域の中に、



写真2—見学できる龍源寺間歩(坑道)



写真3—地元での決定の瞬間の喜び



写真4—萩葉銀。室町期(1550年頃)。日本で現存する初期の石見古丁銀



図1—ベルギーのアントワープで印刷されたティセラの「日本図」(1595年)

銀山だけでなく、銀の積み出しのための港と銀山を結ぶ二つの街道、町並み、山城が含まれています。そして世界遺産委員会で高い評価を得たのが、銀生産とともに周辺の山林を育成し、緑化を行い、自然景観を大切に、調和・共生する環境という21世紀への極めて貴重な提言ができるモデル的な産業遺産であることです。

3—石見銀山発見と大航海時代

江戸時代に書かれた『石見銀山旧記』によると、延慶2年(1309年)、現在の山口県東部にあたる周防国主大内弘幸公は石見国の仙ノ山に銀がたくさんあることを告げられ、地表に露出した「粹銀」と呼ばれる自然銀を掘り出し、軍資金にしたと記されています。その後、この粹銀はほぼ掘り尽くされ、銀山の歴史は200年間の空白となります。

1) 神屋寿禎と先進的な灰吹法の導入

大永6年(1526年)、博多の豪商である神屋寿禎は日本海を船で出雲の鷲銅山に向かう途中、霊光輝く仙ノ山を見て銀の山であることを直感します。天文2年(1533年)には、宗丹と慶寿という二人の技術者を招き、「灰吹法」と言う銀精錬技術を導入したのです。当時としては画期的な灰吹技術により、大量の銀生産が可能と

なり、日本史上まれな銀生産の隆盛をもたらしたのです。シルバーラッシュは年間40tにも及び、世界の銀の1/3は石見産だったと言われています。

2) 石見銀は明国・ポルトガル、そして世界へ

石見銀の名声は明国から西欧へ、マルコ・ポーロのジバング伝説と相まって、大航海時代のポルトガルやスペインの夢の到達点となってゆくのです。

天文18年(1549年)、イエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルは日本にキリスト教を伝道しました。天文21年(1552年)、ザビエルがインドのゴアに滞在中のロドリゲス神父に宛てた書簡によると、「カスチリア人はこの島々をプラタレアス群島(銀の島)と呼んでいる」と報告しています。

3) ティセラの日本図に見る石見銀山

文禄4年(1595年)、ポルトガル人宣教師ルイス・ティセラが作製した『日本図』の中には、ラテン語で「Argentifodine(銀鉱山)」と石見銀山が記されています。石見銀は神秘的な宝物、ポルトガル人の日本航の目的、垂涎の的だったと言っても過言ではありません。まさに、お宝の頂点にあったのです。

石見銀山の特徴は、戦国時代から安土桃山時代の中世にあっても、国際的な交流がポルトガル人によって東アジアのみならず広範囲にわたって行われたことです。しかしダイナミックなエンジンのようなパワーを示した石見銀山ですが、江戸時代に入ると次第に産銀量も減ってゆきました。

4—大森町文化財保存会

平成19年アジアで初めての産業世界遺産となった石見銀山は、人類共通の世界の宝として未来に引き継いでゆかねばなりません、その活動は地道な歩みとして前から始まっています。



図2—カナダのケン・ハクスレーが描いた龍源寺間歩(1988年)



■図3—石見銀山絵巻(上巻)江戸末期。間歩内作業図



■図4—石見銀山絵巻(下巻)江戸末期。灰吹法の図



■写真5—リニューアルした石見銀山資料館(2007年3月)



■図5—大田市世界遺産センター完成予定図



■写真6—観光客で賑わう大森町

石見銀山は大正12年(1923年)に休山となり、その後衰退の一途をたどりまし。昭和31年(1956年)、銀山のある大森町が大田市に合併されるに及び、昭和30年代の後半には、ゴースタウンと言われるほどでした。急速な過疎化に町民は危機感を抱きました。

大森町は『石見銀山旧記』に、慶長(1596～1615年)初期には「人口が20万で寺院は100あり、その賑わいは京や堺に匹敵する」と記されていました。その奥の深い歴史に大きな誇りを抱いていた当時の町民は、次世代に残し伝えられるものは、石見銀山の谷あいにも眠る多くの「間歩」と呼ばれる坑道や、神社仏閣などの史蹟、文

化であることに気がつきました。風情を残す町並みで静かに生活していた町民は、昭和32年(1957年)に全戸をあげて、遺跡の国史跡指定や町並みの重要伝統的建造物群保存地区選定などを推進する「大森町文化財保存会」を結成し、毎年、史蹟や河川の清掃・保存活動を地道に続けてきました。その一環で昭和44年(1969年)には、地元の大森小学校に「石見銀山愛護少年団」が生まれました。少人数の学校ですが、みんな銀山が大好きな少年少女たちです。子供たちが史蹟の清掃や探索を体験することによって、やがて成長し自らが文化財の传承人となっていったのです。

■表1—石見銀山の歴史略年表

時代	西暦	年号	出来事
鎌倉	1309	延慶2年	大内弘幸により初めて石見銀山発見される「石見銀山旧記」
室町・戦国	1526	大永6年	博多の豪商、神屋寿禎、石見銀山を開発
	1533	天文2年	宗丹・慶寿により灰吹法銀精錬が始まりシルバーラッシュに
	1556～62	弘治2年～永禄5年	毛利氏と尼子氏が争奪戦を展開、毛利氏が支配
	1568	永禄11年	ドラード地図(ホルトガル)に銀鉱山王国の記載
	1585	天正13年	毛利氏と豊臣氏の共同管理
安土・桃山	1600	慶長5年	関ヶ原の戦いの後、徳川氏が領有する
	1602	慶長7年	年産4,400貫＝15tの銀を産出する
江戸	1603	慶長8年	安原伝兵衛、釜屋間歩を発見、家康公に3,600貫の運上銀
	1624	寛永元年	銀山全体の銀産出量が減少し始める(年間1,200貫＝4.5t)
	1675	延宝3年	石見銀山領は代官統治に格下げ
	1731	享保16年	芋代官、井戸平左衛門着任
明治	1869	明治2年	大森県が置かれる(約半年)
大正	1923	大正12年	経営不振で休山
	1957	昭和32年	大森町文化財保存会の発足(全戸加入)
昭和	1987	昭和62年	重要伝統的建造物群保存地区に選定
	2001	平成13年	世界遺産暫定リストに登載
平成	2005	平成17年	石見銀山景観保全条例を施行、史跡石見銀山遺跡保存管理計画を策定 石見銀山協働会議を設置
	2006	平成18年	世界遺産登録推薦書をユネスコに提出
	2007	平成19年	世界遺産委員会にて登録決定(7月2日)

5—石見銀山資料館

昭和51年(1976年)、国の史蹟である代官所の中庭にあった明治35年(1902年)に建てられた木造の邇摩郡役所が、解体される話がでました。それを危ぶんだ地元の有志たちは行政に働きかけ、当時残されていた銀鉱石や鉱山関係の資料等を集めて展示する「石見銀山資料館」として開館するに至りました。当時はまだ文化財への関心が低かった時代でしたが、このすばらしい歴史を自分たちで守り育てようという住民の心意気は高いものでした。この施設は、今では地域の文化財保存運動のガイダンス拠点として機能しています。世界遺産登録も間近となり、平成19年3月には訪問者の増加に対応しようと民間だけの力でリニューアルの大改装も行いました。入館者も、これまでの年平均3～4万人を大幅に上回る15万人になろうとしています。

石見銀山は町衆の住民の熱い思いが反映される地域です。個性ある住民の行動が指標やヒントにもなって行政にも反映されています。石見銀山資料館開館のプロセスが手本となり、明治期の地方銀行の歴史的建造物が移築され、迎賓館・文庫として活かされています。また、住民一人一人が意識して町の風情を大切にしながら、酒蔵を工房に、古民家を改修して子供の柔道場、銀や鉄の芸術家の展示場・ショップ、ギャラリー、レストラン、おみやげ店として活かされ歴史の町に溶け込んでいます。

6—石見銀山協働会議

地元の大田市では、平成19年オープンした「世界遺産センター」を、さらに研究・展示・ガイダンス棟として拡充し、灰吹法などの解説もできる精錬所を再現する予定となっています。石見銀山資料館とともに、石見銀山の研

究センターとして最新の調査成果を公開する施設として期待されています。

石見銀山遺跡は登録されたばかりですが、観光客は一気に5～6倍にもなりました。100万人を大幅に上回る来訪者の受け入れ対策、駐車場やバス輸送などの交通問題、トイレ、レストラン等々の問題も浮上しているところです。人口が450人足らずとなっている地元住民の生活もあり、即、満足のゆくものとなるほど決して生やさしいことではありません。しかし大田市が主催する「石見銀山協働会議」において、平成17年から学者・研究者を交えて、今後起こり得ると予想される観光の受け入れ対策や、住民の安全保全、交通対策などについて熱心に話し合いが続けられています。一方、地元の県立大学などの地域づくりをテーマとしたゼミでも活発に研究対象として取り上げられており、若者の知恵や工夫も生かされた、懸命な努力が行われているところです。

7—そして次世代へ

今年は、アジアで初めての産業世界遺産となった石見銀山の関係者だけでなく、国内外の多くの人々のまなざしと熱い思いを肌で感じる年になると思います。世界の宝物と認められたことで、住民の喜びと誇りは最大のものとなり、深遠壮大な歴史を大切に、そして次世代へ伝えてゆこうと思います。前向きに一歩一歩、成長しようとする心の構えも大切となっています。大航海時代、西洋のあこがれであったジパングの銀鉱山は、自然との共生の中で栄えた山であり、環境への提言も含めた21世紀の世界遺産です。今、世界中の多くの人々の熱い思いも受けて、ユネスコの国際舞台のキャンパスとして、明るく成長してゆこうとしています。